

## 在宅片麻痺患者における趣味活動獲得の規定因子

石森 卓矢<sup>1)</sup> 飯野 雄太<sup>1)</sup> 風晴 俊之<sup>2)</sup> 美原 盤<sup>3)</sup>

1) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 訪問看護ステーショングラウチア  
リハビリテーション部門

2) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 リハビリテーション科

3) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 脳神経内科

[目的] 訪問リハビリの役割には生活活動の活性化と社会参加の促進がある。我々は、趣味活動を獲得した在宅片麻痺患者の特徴として、単変量解析を行い、ADL 能力、生活範囲、上下肢機能が高いことを報告した。今回、趣味活動を獲得した在宅片麻痺患者の規定因子について、多変量解析を用い検討した。

[対象] 2011 年 4 月から訪問リハビリを開始し、2018 年 3 月までに終了した脳卒中片麻痺患者で、訪問リハビリ開始時には趣味活動を行っていない 104 名(男性 65 名、女性 39 名、 $70.9 \pm 11.1$  歳)を対象とした。なお、訪問リハビリの利用が 1 ヶ月未満の患者、全身状態悪化および死亡で終了した患者は除外した。

[方法 1] 訪問リハビリ終了時の FAI の趣味項目を調査し、1 点以上を趣味獲得(22 名)、0 点を趣味未獲得(82 名)として目的変数に設定し、趣味活動に影響を及ぼすと考えられる訪問リハビリ終了時の年齢や FIM-M、LSA など 9 項目を説明変数として、ロジスティック回帰分析を行った。

[結果 1] 趣味活動の獲得に影響のある因子は LSA のみであった( $p < 0.05$ )。

[方法 2] LSA が趣味活動に影響しているため、LSA と FAI および趣味の項目の関連性について Spearman の順位相関係数を算出した。

[結果 2] LSA と FAI とは  $r_s = 0.79$  と強い相関関係を認めた( $p < 0.05$ )。LSA と趣味項目は  $r_s = 0.5$  と中程度の相関関係を認めた( $p < 0.05$ )。

[考察] 趣味活動が獲得された利用者の規定因子として、生活範囲が示された。これは、生活範囲の拡大により獲得できる趣味活動の選択肢が多くなること、または趣味活動を行うことで生活範囲が拡大することの双方が考えられる。このことから、趣味の獲得においては自宅内での上下肢機能訓練や ADL 訓練のみを行うのではなく、生活範囲を拡大するアプローチを行っていくことが重要であると考えられた。